

校長室から

学力の定着・向上をめざして

学校教育と家庭の役割

禾生第二小学校

校長 大森繁樹

I はじめに

児童が心身ともに豊かで健やかな成長を育むことを目標とする学校教育において、その指導の最大の柱が児童の学力の定着・向上です。本校では、学力調査やこれまでの取り組みの中で、学習規律の確立や学力の定着及び学級内の学力格差、家庭学習の取り組み方などの課題を明らかにし、取り組んできました。今年度も昨年度の成果と課題をふまえ、さらなる基礎学力の定着と確かな学力向上を目指し、取り組みを進めています。

しかし、児童の学力の定着・向上には、家庭のご協力が欠かせません。学力の定着・向上にむけて学校教育と家庭がどのように連携し、役割分担していくべきなのかについて考えていただきたいと思います。

II やまなしスタンダード

山梨県教育委員会では、「すべての学校で校長のリーダーシップの下、全職員がチームとなって授業研究が行われている山梨県」を合い言葉に、児童生徒の確かな学力の定着・向上を目指した取り組みを進めています。その中で「やまなしスタンダード」を提唱し、授業改善の方向性を示しています。

やまなしスタンダード

○授業づくりの7つの視点

- ①授業のはじめに児童生徒に授業のめあて（目標）を示している。
- ②話し合い、討論、発表などの言語活動を効果的に取り入れる。
- ③児童生徒は、他の人の話や発表に耳を傾けている。
- ④児童生徒は、ノートをとっている。
- ⑤活用・探究など、学んだことを別の場面で使うようにしている。
- ⑥授業や単元の終わりに、児童生徒がめあて（目標）を達成しているかを評価している。
- ⑦家庭学習（宿題や課題）と授業が、有機的に結びついている。

III 禾二小スタンダード

今年度本校では、「やまなしスタンダード」うけて、より本校の実態に合わせたものとして禾二小スタンダードを設定しました。禾二小スタンダードは、学力向上に必要な要素と本校の児童の実態の中で課題となっているものを7つの重点に絞り、取り組んでいこうとしているものです。

○学力向上 7つの重点

- (1) 学習規律の確立
- (2) 基礎・基本を重視した指導
- (3) 活用型学力の育成
- (4) 「なぜだろう」を重視した学習活動
- (5) 学習習慣の定着
- (6) 互いを認めあえる学級集団づくり
- (7) 読書活動への意欲喚起と習慣化

また、確かな学力の定着・向上の一番のコアは、毎日の授業です。その授業改善の視点としてやはり7つのポイントを掲げ、取り組みを進めます。このポイントの改善に基づいた授業実践を積み重ねることで、児童の確かな学力の定着・向上を図っていきたいと考えています。

○授業づくり 7つの視点

- ① 聞く態度・聞く力の育成
- ② 授業のめあての明示
- ③ 授業の振り返りと確認
- ④ 言語活動の工夫とアウトプットを意識した授業展開
- ⑤ 可視化 焦点化 共有化を意識した教育活動
- ⑥ 学年で最低限身につけるべき内容の焦点化

IV 学力の定着・向上にむけてた家庭の役割

上記のような取り組みを学校では進めています。児童の学力の定着・向上には、学習や読書の習慣化、家庭学習の推進等で各家庭のご協力が不可欠です。児童の学力の定着・向上にむけて家庭での役割とその重要性について以下の点から考えてみてください。

1 家庭環境・親の関与の重要性

- ・ 学校で教えたことの定着は、家庭学習によるところが大きい
(例) 漢字や計算：家庭で何度も繰り返しやることで身につく
- ・ 学校はみんな共通の環境だが、家庭はさまざまである。したがって、差異を作るのは家庭環境・家庭学習にあるのではないかという意見もある。

お茶の水女子大学教授の浜野貴先生は、児童の学力の定着・向上には、家庭環境や親の関与が非常に重要であると語っています。例えば漢字や計算などは、学校で意味ややり方を教わった後、家庭で何度も繰り返しやることで身につくという側面

がありますが、学校で教えたことの定着は、家庭学習によるところが大きいのです。学校はみんな共通の環境で、同じ時間を使いながら学習していきませんが、家庭はさまざまです。家庭でどのように過ごすのかによって、学力の定着度が変わってきます。学力等の差異を作るのは家庭環境・家庭学習である、という議論もあります。

2 学力に影響する「家庭での働きかけや親の行動」

- (1) 生活習慣に関する働きかけ
- (2) しつけや人間形成に関する働きかけ
- (3) 本・新聞・絵本の読み聞かせ
- (4) 学習・勉強に関する働きかけ
- (5) 文化・芸術・自然体験に関する働きかけ
- (6) テレビゲームや携帯電話に関するルール
- (7) 子どもとの会話や一緒に過ごす時間
- (8) 保護者自身の行動

各種調査の結果から、学力がしっかり定着・向上している児童の家庭に共通して見られる点として、家庭での働きかけや親の行動について8つの視点が示されました。

(1) 生活習慣に関する働きかけ

- ・子どもが決まった時刻に起きるよう（起こすよう）にしている
- ・子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている
- ・毎日子どもに朝食を食べさせている

児童の体調管理と活動への集中力・意欲には、基本的な生活習慣の確立が欠かせません。“**早寝、早起き、朝ご飯**”の大切さを再認識したいと思います。

(2) しつけや人間形成に関する働きかけ

- ・自分でできることは自分でさせている
- ・子どものプライバシーを尊重している
- ・子どものよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている

国際的な学力調査において、日本の子どもの自尊感情・自己肯定感の低さが顕著に表れています。児童が一人ひとりかけがえのない存在として大切にされ、自信を持って活動することが重要です。

(3) 本・新聞・絵本の読み聞かせ

- ・子どもに本や新聞を読むようにすすめている

- ・子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている
- ・子どもが小さい頃、絵本の読み聞かせをした

学力の定着・向上について、読書活動が重要であることは、改めていうまでもありませんが、その中でも“読み聞かせ”について、国際的にも各国の研究者が様々な研究・調査結果からその重要性を指摘しています。

(4) 学習・勉強に関する働きかけ

- ・普段、子どもの勉強をみている
- ・計画的に勉強するようにうながしている
- ・子どもが英語や外国の文化に触れるよう意識している
- ・子どもの成績がふるわないほど親が「勉強しなさい」という傾向がある

家庭での学習・勉強に関する働きかけが重要であることは当然ですが、どのような働きかけをするか、その中身を見直す必要があります。児童が主体的に取り組めるよう、自信をつけさせたり、取り組む方向を具体的に示すような働きかけを心がけてほしいと思います。

(5) 文化・芸術・自然体験に関する働きかけ

- ・子どもと一緒に図書館に行く
- ・子どもと一緒に博物館や科学館に行く
- ・子どもと一緒に美術館や劇場に行く

子どもの豊かな感性や情緒を育むためには、文化・芸術的なものに触れることがとても重要です。普段、なかなか子どもと一緒に文化・芸術的施設に行く機会を取るとは難しいと思いますが、夏休みなどの長期休業などを利用し、動物園や水族館、スポーツ観戦なども含めて、是非そのような機会を設けることを心がけてほしいと思います。

(6) テレビゲームや携帯電話に関するルール

- ・テレビゲームで遊ぶ時間を限定している
- ・携帯電話やスマートフォンの使い方についてのルールや約束がある

テレビゲームや携帯・スマホの課題や悪影響については、年々大きな問題になっています。SNS等の普及により便利になった反面、児童が深刻な問題や事件に巻き込まれる事案も発生しています。特にこの問題は、学年が進むほど深刻な問題なることが多い傾向があります。家庭できちんと子どもたちと話し合いながら（一方的な命令でなく）ルールや約束をきめ、それを守らせることが重要です。

(7) 子どもとの会話や一緒に過ごす時間

- ・子どもから学校での出来事について話を聞いている
- ・子どもと勉強や成績のことについて話をする
- ・子どもと社会の出来事やニュースについて話をする

毎日の生活の忙しさの中で、子どもとの会話や一緒に過ごす時間が少なくなっているいませんか。また、子どもに話すときには、いつもしかたたり、注意したりしている「ダメ出し」の会話になっていませんか。子どもたちは、家の方と話をすることを求めています。（外見上は無視しているように見える子どもも、内心では求めています。）

子どもとできるだけいろいろな話をしたり、一緒に過ごす時間をとってください。話をしながら、ほめたり、認めたり、一緒に考えてあげてください。今は実感できなくても、子どもと一緒に過ごすことができるかけがえのない時間は、あっというまに過ぎてしまいます。

（８）保護者自身の行動

- ・保護者が規則正しい生活を心がけている
- ・保護者が地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に興味がある
- ・保護者がよく本を読む（漫画や雑誌を除く）
- ・保護者が新聞の政治経済や社会問題に関する記事をよく読む

「子どもは親の鏡」と言われます。また、福沢諭吉の「一家は習慣の学校なり、父母は習慣の教師なり」（教育の事）という言葉もあります。子どもたちの生活や学習への取り組みについて、保護者の方々の取り組み・姿勢が大きな影響を与えます。

3 家の仕事・手伝いをさせることの効果

- 日本の子どもは国際的にみても家事手伝いをしない傾向にある
 - 庇護された知育偏重の子育てが行われている
- 手伝いと学力の関連は必ずしも強いとは言えないが、人間形成においては大変重要
- 自分のしたことが他人の役に立ったという経験を得られる
 - 「自分は誰かのために必要な存在なんだ」自尊心・自己肯定感
- 家事をよくする子ども → 社会的関心、積極性、自立に優れているという実証研究
- 家庭や親でなければできないこと、させられないことがある

今、学校教育ではキャリア教育の推進が求められています。その中で働くことの意味や意義、さらには自分自身の生き方について考えていく取り組みが進められています。日本の子どもは、知育偏重の教育がすすめられ、国際的にみても家事手伝いをしない傾向にあります。子どもたちが、激動する社会の中でたくましく自立して生きていく力を育むためにも、家での仕事・手伝いを責任をもって取り組ませる重要性や効果について見直していただきたいと思います。

4 親子の間の信頼関係

◇親子の間に信頼関係を築く「共有型しつけ」

- 親との信頼関係が成立している子どもは、自尊感情・自己肯定感が高い傾向にある
- 「しつけスタイル」には、共有型、強制型、自己犠牲型がある
- 大人が子どもと対等な関係で触れ合いを重視し楽しい体験を共有・享受する「共有型しつけ」の家庭では、子どもの語彙力が豊かになる

親子の関係は、信頼関係で結ばれることが当たり前だと思いがちですが、なかなか難しいものです。問題行動がある子どもの場合で、原因を探っていく中で、思春期を迎え問題が表面化してきたから、その関係がうまくいっていなかったことに気がつくことも多くみられます。家庭でのしつけが信頼関係の上で成り立っているのか、時には家庭生活について見直す事も重要です。先にあげた、学力に影響する「家庭での働きかけや親の行動」について考えていただければその答えにつながってくると思います。

最後に浜野先生が共同研究者の先生と提唱されている子育て10カ条を示します。

子どもとの信頼関係を作るための子育て10カ条

- 第1に、親子の間に対等な人間関係をつくること
- 第2に、親は子どもの安全基地になること
- 第3に、子どもに『勝ち負けの言葉』を使わない
- 第4に、子どもの言葉や行動を共感的に受け止め、受け入れる
- 第5に、他児と比べず、その子自身が以前より進歩したときに承認し、誉める
- 第6に、裁判官のように禁止や命令ではなく、「～したら」と提案の形で対案を述べる
- 第7に、教師のように完璧な・詳細な・隙のない、説明や定義を述べ立てない
- 第8に、子ども自身に考える余地を残す働きかけをすること
- 第9に、親は「待つ」「みきわめる」「急がない」「急がせない」で子どもがつまづいたときに支え、足場をかけ、子どもが一步踏み出せるように、わきから助けてあげる
- 第10に、子どもと共に暮らす幸せを味わおう

V おわりに

本校では、禾二小に通う全ての児童が、一人ひとりの個性を伸ばし、健やかに成長していけるようこれからも全力を挙げて取り組んでいきます。しかし、その目標を達成するためには家庭のご協力が欠かせません。ぜひこれからも、学校と家庭が豊かにつながり、大きな輪となって子どもたちを見守っていきたいと考えております。

ご協力よろしくお願いたします。